

内容

- 1 第17次共同研究3年次の方向性について
- 2 主体的に学習に取り組む態度の評定及びルーブリックの考え方について
- 3 リーフレットの様式・内容について

1 第17次共同研究3年次の方向性について

研究主題 学びに向かう力の育成に向けて指導と評価の在り方

研究のねらい

各教育研究所・研修センターが学校支援のために活用する、**学習指導**や**学習評価**に関する**実践事例の収集・提供**や**参考資料の作成**により、学びに向かう力の育成に向けた授業力の向上に資する。

研究内容1

学びに向かう力の育成に向けた**学習指導**

研究内容2

主体的に学習に取り組む態度を見取る**学習評価**

【作成・収集する事例】

A 学びに向かう力の育成に向けた授業実践例（視点ア～ウ）

ア 学習の見通しがもてる学び方の工夫

- ・単元を通した課題等の設定
- ・児童生徒と学習評価の方針を事前に共有する場面の設定

イ 単元内容のまとまりの中で、自らの考えを記述したり話し合ったりする活動の工夫

ウ 自らの理解の状況を振り返る活動の工夫

B 主体的に学習に取り組む態度を見取る評価事例（視点ア～キ）

ア 「粘り強さ」と「学習の調整」を意識した評価規準の設定

イ 「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」を意識した評価場面の精選

ウ 「十分満足できる」学習状況の検討

エ 「努力を要する」状況の児童生徒への手立て

オ 記述ではない形で表出する児童生徒の姿に着目した評価方法の工夫

カ 「指導に生かす評価」の結果を用いた授業改善

キ 単元を通した「主体的に学習に取り組む態度」の総括的評価

↓道研連 HP「指導案バンク」に収集した実践例

A

- ア 網走 プラタナスの木 マウンテン 学習の見通しをもたせるどんな学習をするか、どんな力を身につけるか 学習の調整
- イ 留萌 教師用だけでなく、児童用ルーブリックも作成した 数値を使用する Xチャート
- ウ 上川 一枚ポートフォリオ 毎時間の振り返りで、常にゴールを意識して活動できる 質の高い単元の振り返り

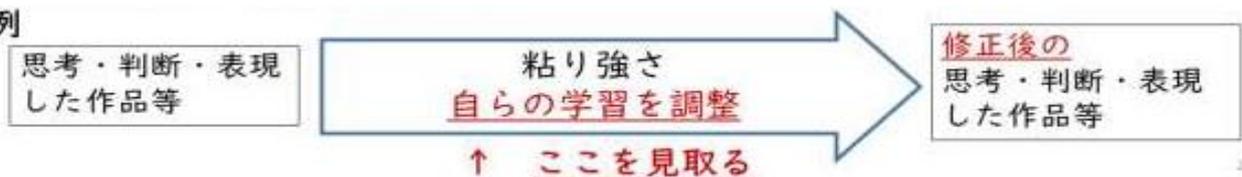
B

- ア 日高 粘り強さ、を發揮して欲しい内容 自らの学習の調整 単元の具体的な言語活動
- イ 胆振 記録〇 指導・ 評価場面を精選する
- ウ 釧路 二回目の授業に向けて工夫する姿勢が見られた
- エ ヘき地 評価基準を設定し、C 生徒への手立ての事例
- オ 上川 ミニパフォーマンステスト
- カ 後志 ジャムボード
- キ 函館 友だちとの意見交流後により良くしようとし、新たな紹介文を書いた

【主体的に学習に取り組む態度の見取り方について】

①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面と、②①の粘り強い取組の中で、自らの学習を調整しようとしている側面という二つの側面が求められている。
⇒「主体的に学習に取り組む態度」を個別に見取る（点で見取る）のではなく、2観点の獲得に向かうプロセスを見取ろうとすることが重要ではないか。

例



研究当初は、「知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた」という部分にあまり意識が向いていなかったように考えられる。端的に言うと、「主体的に学習に取り組む態度」を単体で見取ろうとしていた傾向にあった。しかし、研究が進むにつれて、「主体的に学習に取り組む態度」を個別に見取る（点で見取る）のではなく、②観点の獲得に向かうプロセスを見取ろうとすることが重要だという考え方で、共通理解が図られるようになった。

例えば、思考・判断・表現した作品を、修正できるような単元計画を設定し、それを修正するプロセスで発揮された、粘り強さや自らの学習の調整を見取ろうという考え方をベースにした事例を数多く収集できた。

1・2年次の成果

- ①実践に基づいた単元の指導計画やワークシート、評価の実際等を掲載したことで、特に経験の浅い教員にとって参考となる資料を計20事例作成できた。
- ②評価を意識して指導計画を作成したことで、作成者の授業観の転換がなされた。
- ③評価の場면을精選した指導計画を構想したことにより、指導と評価の一体化がなされ、教職員の負担軽減につながることを確認できた。
- ④ループリックにより、教師の指導の方向性が明確になるとともに、子どもの学習状況を見取りやすくなり、「十分満足できる状況」(A)に引き上げやすくなった。
- ⑤ループリックを活用し評価の方針を子どもと共有したことで、子どもが見通しや目標をもったり、振り返りが充実したりし、子どもの学習への満足感が高まった。
- ⑥振り返り等を用いて、子どもの学習状況を見取ったことで、子どもが次時にどのような学習をしたいかが把握しやすくなった。

1・2年次の課題

- ①評定の在り方について、共同研究推進委員としての一定の方向性を示すことが望ましい。
- ②ループリックの作成において、B基準とA基準の違いを明確にすることや、C基準の表記の仕方、量的な指標になりがちな面に難しさを感じることから、共同研究としてのループリックの在り方を明確にする必要がある。
- ③具体的には、数値化したループリックにとどまらず、教科の特性等を考慮しながら、A基準のキーワードや変容の具体を一層明確にする必要がある。
- ④ループリックの取組は一定の習熟が必要であることから、学校において単発で終わらず継続して実施する必要がある。
- ⑤個に応じた指導の充実に向けて、「努力を要する」状況(C)の子どもにどのような支援を行うか検討する必要がある。
- ⑥指導に生かす評価及び、記録に残す評価の評価場面を一層明確にする必要がある。
- ⑦単元の始めに、子どもにどのような学習計画を立てさせるか研究を深める必要がある。
- ⑧ICTや思考ツール等を、いかに指導や評価に活用するか研究を深める必要がある。

3年次の方向性

- ①収集した事例をもとに、参考資料(リーフレット、8項以内)を作成する。
- ②参考資料は、事務局が中心に作成し、7月末を目処に完成を目指す。
- ③第1回委員会において、参考資料の理論編(トピックス)の部分に、共同研究推進委員としての評定やループリックの考え方を示した上で、参考資料の様式とあわせて、推進委員と検討を行う。
- ④2年次の課題として出された内容については、今年度の共同研究推進委員会で継続して検討を行う。
- ⑤今年度は全教連北海道大会のため、研究の成果を発表する機会がないことから、9月2日(金)にZoomによる研究発表(放課後の時間に45分間程度)の機会を確保する。
- ⑥研究発表については、今年度の共同研究推進委員が中心となって行う。

【説明・協議1】 第17次共同研究3年次の方向性について

＜3年次＞推進スケジュール（案）

29

5月13日（金）	【第1回 共同研究推進委員会】
7月1日（金）	【第2回 共同研究推進委員会】 オンライン ・リーフレットの完成 ・協議…（仮）「努力を要する」状況（C）の子どもへの支援 ・第17次共同研究発表会に向けての準備
7～8月	・共同研究推進委員と発表会の打合せ
9月2日（金）	【第17次共同研究発表会】 オンライン ※放課後45分程度 ・共同研究推進委員による発表会
9～10月	第18次共同研究の研究テーマに係るアンケート実施 （加盟機関の全所員対象予定） ※クラウドサービスを活用
11月21日（月）	【第3回 共同研究推進委員会】 オンライン ・第18次共同研究の内容の検討
2月8日（水）	【連盟委員会】 第18次共同研究の概要 提案

2 主体的に学習に取り組む態度の評定及びルーブリックの考え方について

ルーブリックをつくることで、子どもにどのような力を育てることが必要なのかを具体的に捉えることができるとされている。すなわち、ルーブリックを作ること自体にも意義がある。

【説明・協議2】 主体的に学習に取り組む態度の評定及びルーブリックの考え方について

用語の確認

評定	<ul style="list-style-type: none"> ・ 観点別学習状況の評価の結果を総括するもの ・ 5段階で評価（小学校は3段階。小学校低学年は行わない）
形成的評価的	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導を改善し児童生徒を伸ばすための評価 ・ 一定の学習過程の途中で学習状況について評価し、改善すべき点を発見して指導や学習の向上に用いる評価
総括的評価的	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習状況の判定（評定）のための評価 ・ 一定の学習が終了した時点で、その間の学習成果や学習状況を要約して示すもの

参考：「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」6頁
 参考：石井英真・鈴木秀幸『ヤマ場をおさえる学習評価 小学校』図書文化、2021年、11頁
 参考：鈴木秀幸「形成的評価と総括的評価」『指導と評価』2022年1月号、8頁

◎中教審学習評価ワーキンググループ委員の鈴木氏の評価の考え方

【説明・協議2】主体的に学習に取り組む態度の評価及びルーブリックの考え方について

【参考】「主体的に学習に取り組む態度の評価」の考え方 例①
表 第3観点, 評価の求め方 (小・中学校)

「知識・技能」：知、「思考・判断・表現」：思、「主体的に学習に取り組む態度」：主

知思	小 学 校				中 学 校			
	主の 基本	評価の 基本	明白な根拠がある		主の 基本	評価の 基本	明白な根拠がある	
			主の 変更	評価の 変更			主の 変更	評価の 変更
AA	A	3	B		A	5	B	4
AB/BA	B	2	A	3	A	4	B	3
BB	B	2	A		B	3	A	
							C	
BC/CB	B	2	C	1	B	2	C	1
CC	C	1	B		C	1	B	
AC	B	2			B	3		

鈴木秀幸「『主体的に学習に取り組む態度』の評価—他の二観点と連動させる—」『指導と評価』2021年11月号38-40頁 34

・他の観点から切り離して「主体的に学習に取り組む態度」として評価することは適切ではない。

⇒「主体的～」は、「知識・技能」と「思考・判断・表現」の観点と基本的に連動する。

しかし、「明白な根拠のある場合」は、この連動性の基本を適用しない場合もあるとしている。

【説明・協議2】主体的に学習に取り組む態度の評価及びルーブリックの考え方について

【参考】「主体的に学習に取り組む態度の評価」の考え方 例①
明白な根拠がある場合

もともとこの観点を信頼性、妥当性をもって評価するのは難しいので、**誰が見ても一段下げる（上げる）べきと考える（明白な根拠がある）場合に限定すべきである**

1段下げるケース（粘り強く学習に取り組むことに反する）

- 授業が始まってすぐに、授業とは別のこと（別の科目の学習など）をやりはじめてしまうようなことが頻繁にある
- 宿題を出したのに、ほとんどやってこない 等

1段上げるケース

- 「わからない場면을改善するための方法を考えることができる段階」と判断できる ※メタ認知能力
- (A基準の)多くの**キーワード**に該当する場合 ※粘り強さ

鈴木秀幸「『主体的に学習に取り組む態度』の評価—他の二観点と連動させる—」『指導と評価』2021年11月号38-40頁 35

評定に関するR3委員の意見

【よさ】

- ・ 鈴木氏の考え方は、明確な基準があり学校全体でできると負担軽減になる。
- ・ 勤務校では鈴木氏の考え方で評定を行っている（2校）。
- ・ Bの中にAが入っているのは、納得できるものである。

【懸念】

- ・ 回数をルーブリックに設定しても根拠が曖昧である。
- ・ 宿題や拳手の回数では正当な評価になるか懸念される。
- ・ 児童や保護者に納得の得られる加点基準にする必要がある。

38

事務局の見解

39

- 主体的に学習に取り組む態度において、A基準とB基準を明確に分けられないという考え方は、総意が得られる。
- Aと判断される姿を見取り、加点方式で見取るのが現実的。
- Aと判断する基準については、回数のみを根拠にするのは信頼性に欠ける。
- 主体的に学習に取り組む態度の「○：記録に残す評価」については、「全員を評価する場面」という捉えではなく「見取りやすいと想定される箇所」という押さえの方が現実的。
- 鈴木氏の事例を評定の方向性として示す場合、「宿題をやってきたかどうか」を一段下げる明確な根拠の一つとすることは、国が目指す方向性と異なるためカット。

以上の考え方で作成する場合のルーブリックの記述例（案）

評価規準 判断基準	記述語（主体的に学習に取り組む態度）
A 「十分満足できる」状況	【加点するポイント】 <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の方で問題を見出して、アンケートを作るなど学習の計画を立てている。 ・ 1回の比較・調査で終わらず、さらに調査や追究を進めている。 ・ 友達の考えを取り入れて、修正している。 ・ 友達により影響を与える取組をしている。等
B 「おおむね満足できる」状況	【評価規準】 <ul style="list-style-type: none"> ・ 問題解決に必要なデータを集め、観点を定めて分類整理し、それをグラフに表して見いだしたことを表現しようとしている。
C 「努力を要する」状況	【手立て】※B規準に到達していない子（表現しようとしていない子） <ul style="list-style-type: none"> ・ 幾つかの問題から選択できるように選択肢を用意しておく。 ・ 過去の作品や見本を示し、完成（ゴール）をイメージさせる。 ・ 児童同士の交流を設けて見通しをもたせる。等

40

- ・C「努力を要する」状況については、B基準に到達していない児童生徒に対する手立てを記入する。児童生徒に示すことはしないが、教師が手立てをいくつか準備しておくことで、Cの児童生徒が生まれた場合に適切な手立てを講じることができる。

◎Aの基準について

これまでは、Aの基準を明確にしようと努めてきたが、その基準を設定することが非常に難しかった。そこで、【Aと判断するポイント】をいくつか示しておき、見取ることができた児童生徒に加点していくという考え方が現実的ではないだろうか。

《事務局が提案した、評定の考え方についてのよさ・改善点等の協議内容》

- ・A基準のキーワードは、分かりやすく、イメージが付きやすいが、少なすぎても多すぎても上手く活用できない。文言も含め、精選が必要である。
- ・Bの中にAがある、という考え方は納得できる。また、加点方式も分かりやすい。しかし、「Bにどれだけ加点されたらAになるのか」という、別の不明瞭さが生まれる。例えば、「10個の加点のうち、4個加点されたらA」という形式だと、結局、数値化された評価とならないか。
- ・授業者が、キーワードや加点を、どれだけ見取る場面を意識しているかによるため、その評価の「妥当性」が懸念される。どれだけ見取ることができるか、個人差が出てくるため、教員間（学年、学校、教科間）で統一する必要がある。
- ・複数学級の場合は、共有して行くことができるが、単学級の場合、どうしても一教員の主観が入ってしまう。どのように校内で統一するか。
- ・加点は良いとして、下げる基準も必要なのではないか。

3 リーフレットの様式・内容について

別紙「リーフレット」について、様式・内容について協議した。

出された意見

- ・事例がたくさんあって良い・説明がもっとあると良い・各学校での宣伝が必要
- ・紙媒体、電子データなど、色々な形で・もっと推していく（宣伝していく）と良い
- ・文字の色、画像の吹き出しが読みにくい、見にくい・説明の順番を再考

その他、表記の間違いなどを確認

【連絡】

○第2回共同研究推進委員会について（Zoom）

日時：7月1日（金）15:00～16:30

○インターネットの接続が可能な端末（カメラ機能・音声入出力機能有り）を用意

○事前接続テストについて